



Title	Recurrent Anterior Shoulder Dislocation Caused by a Midsubstance Complete Capsular Tear
Author(s)	水野, 直子
Citation	大阪大学, 2009, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/49830
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed 大阪大学の博士論文について

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

【67】	
氏 名	みず の なお こ 水 野 直 子
博士の専攻分野の名称	博士 (医学)
学 位 記 番 号	第 22594 号
学 位 授 与 年 月 日	平成 21 年 2 月 19 日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第 4 条第 2 項該当
学 位 論 文 名	Recurrent Anterior Shoulder Dislocation Caused by a Midsubstance Complete Capsular Tear (関節包断裂を主病因とする反復性肩関節前方脱臼症例の臨床的検討)
論 文 審 査 委 員	(主査) 教授 吉川 秀樹 (副査) 教授 菅本 一臣 教授 杉本 壽

論 文 内 容 の 要 旨

〔 目 的 〕

反復性肩関節前方脱臼（反復脱）の大半は下関節上腕韌帶（IGHL）-関節唇複合体の機能的破綻によってもたらされる。その破綻部位としては、関節唇の関節窩縁からの剥離であるBankart損傷が最も一般的である。

近年、肩関節鏡の普及に伴い、IGHL実質部の断裂（関節包断裂）や、IGHLの上腕骨頭側からの剥離（HAGL病変）の存在がより明らかとなってきた。しかし、その発生頻度や臨床像についての詳細な報告は未だない。本研究では、関節包断裂が主病因と考えられた反復脱症例の発生頻度を調査し、その臨床的特徴と手術成績について検討した。

〔 方 法 〕

1998年から2003年の間に当施設で手術を施行した反復脱症例303肩において、関節鏡視上、Bankart損傷は279肩(92.1%)、HAGL病変は14肩(4.7%)に認められた。関節包断裂は33肩(10.9%)に認められ、そのうちBankart損傷を合併しない関節包断裂単独の症例は12肩(4.0%)であった。この関節包断裂単独例12肩（男性9肩、女性3肩）を対象とした。手術時平均年齢は25歳であった。臨床的特徴として、初回脱臼時の年齢・受傷原因・脱臼肢位、術前理学的所見、CT関節造影所見（Bankart損傷、Hill-Sachs病変）、関節鏡所見（関節包断裂の部位・Hill-Sachs病変）について検討した。さらに、Hill-Sachs病変に焦点を当て、関節鏡視で、その重症度を分類し、CT関節造影を用いて、その大きさ（幅・深さ・長さ）を計測した。Bankart損傷・HAGL病変の単独例のHill-Sachs病変も同様の評価をし、比較検討した。手術は、断裂したIGHLに本来の至適な緊張を与えるべく、全例に関節包修復術を施行した。11肩は関節鏡視下に、1肩は直視下に修復した。

〔 成 績 〕

初回脱臼時の年齢・受傷原因・脱臼肢位、術前理学所見に大きな特徴はなかった。CT関節造影において、全例でBankart損傷を認めなかった。関節包断裂の部位は、関節窓寄り7肩、中央部3肩、上腕骨頭寄り2肩であった。関節鏡視上、Hill-Sachs病変は、いずれも認めないか、軟骨のくぼみのみであり、Bankart損傷単独例と比較し明らかに軽微であった。CT関節造影におけるHill-Sachs病変の大きさは、Bankart損傷単独例と比較して有意に小さかった（幅P=0.0038、深さP=0.0021、長さP=0.0003）。一方、HAGL病変単独例のHill-Sachs病変は、関節包断裂と同様に小さい傾向にあった。手術成績は、平均経過観察期間31ヶ月で、Rowe scoreが術前平均30.4点から術後平均90.4点へ有意に改善した（P<0.0001）。

〔 総 括 〕

反復脱症例303肩のうち、関節包断裂単独例は12肩4%であり、比較的まれな病態であると考えられた。本研究の結果、関節包断裂単独例は、Hill-Sachs病変を認めないか、あっても小さく軽微という特徴を有していた。肩関節鏡を用いることで、断裂部を関節内から直接的に評価でき、断裂し短縮したIGHLに本来の至適な緊張を与えるような修復が可能であった。また関節包修復術の成績が良好であったことから、関節包断裂が反復脱の主病因となりうることが示唆され、臨床に際し、その存在を念頭に置く必要があると考えられた。関節包断裂の診断・治療に肩関節鏡は有用であった。

論文審査の結果の要旨

反復性肩関節前方脱臼は、外傷性脱臼により、下関節上腕韌帯(IGHL)-関節唇複合体が破綻し、繰り返し脱臼するようになる病態である。その原因は、関節唇の関節窓縁からの剥

離であるBankart損傷が一般的だが、IGHL実質部の断裂（関節包断裂）も原因となりうることが明らかとなってきた。しかしその発生頻度と臨床像は未だ不明であったため、本研究で調査した。その結果、関節包断裂単独例の発生頻度は、反復性肩関節前方脱臼症例303肩中12肩4%であり、比較的まれな病態であることが明らかとなった。さらに、反復性肩関節前方脱臼に特徴的な上腕骨後外側の圧迫骨折であるHill-Sachs病変に焦点を当て、その重症度を肩関節鏡で評価し、大きさをCT関節造影で計測した。その結果、関節包断裂単独例は、Hill-Sachs病変を認めないか、あっても小さく軽微という特徴を有することが明らかとなった。これより、臨床に際し、関節包断裂の存在を念頭に置く必要性を明らかにしたことから、学位に値するものと認める。